

# 主観知の相対化認知過程としての異文化接触行動 —日中学生会議の場合—

## Intercultural contact performance as a relative recognition process of subject knowledge —Case study of Japan-China Students Conference—

砂岡 和子

早稲田大学  
Waseda University

概要：外国語や異なる文化背景を持つ集団同士が、円滑なコミュニケーションを行うための要因について、日本語と中国語によるアジア学生テレビ会議の動画データを観察対象とし、どのような異文化接触行動が場の常識や信頼の醸成に寄与するのか、その過程を分析する。

Abstract: This paper analyzes the process on the elements for collaborative communication among the groups with different cultural backgrounds and languages. How this contributes to the creation of trust and recognition of the common forum based on the video conferences Corpus of Cross-Cultural Miscommunications both in Japanese and Chinese.

### 1. 研究目的

国際交流の拡大と情報通信技術の高度化に伴い、ICT を利用した異文化コラボレーションの機会が増えている。多言語異文化交流の深化には、参加者個人の主観知の集積だけではなく、個人の多文化認識の発達に影響を与えるコミュニティ単位でのコモンセンス知を客観化することが有用であると思われる[人工知能学会第 24 回全国大会,特別セッション“コモンセンス知の構築”主旨]。本文は、外国語や異なる文化背景を持つ集団同士が、円滑なコミュニケーションを行うための要因について、日本語と中国語によるアジア学生テレビ会議の動画データを観察対象とし、異文化接触場面における場の常識の所在や信頼の醸成の過程を観察する。実際の人間行動の基底をなすコモンセンス知を定量的、定性的に明示できれば、多言語交流支援プログラムの企画や外国語教育に寄与できよう。

### 2. 異文化接触型遠隔ビデオ会議という場

過去 10 年間、大学履修科目としてビデオ会議を開催してきた。アジアの遠隔地にある 6 大学の学生同士がテレビ画面を通じて対面し、身近な関心事や時事問題をテーマに討論を行う。

連絡先：砂岡和子, 早稲田大学政治経済学術院, 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1, 電話 03-5286-1213, FAX03-5286-1213, E-mail: ksunaoka@waseda.jp

会議用語は、隔週で日本語と中国語を交互に使用する。隔週の母語での討論は、遠隔対面接触場面の心理的緊張を緩和し、自身が属する社会を内省する好機ともなる。従来、外国語による異文化実践授業では、会議用語以外の言語使用を禁じることが多いが、アジア学生会議の参加者は大学入学後に第二外国語として日本語や中国語を習い始めた (Chinese/Japanese as a Foreign Language=それぞれ CFL, JFL と略称)、初習者が多数を占め、高い語学力は望めない。本学生会議は異文化交流を優先し、未習者や内容が聞き取れない仲間に対する通訳、および内輪の連絡などは、会議用語以外の言語 (日本語、方言を含む中国語、韓国語、英語など) の使用も許可している。近年東アジア圏の人的交流の拡大につれ、どの参加地点にも日本語、もしくは中国語の母語話者 (Native speakers (NS)), もしくはバイリンガルに近い言語能力を持つ学生が増加し、同地点内の非母語話者 (Non-native speakers (NNS)) の討論参加を支援する。時には異地点の言語通訳を買って出ることもある。

### 3. 遠隔接触場面でのソーシャル・スキル

アジア学生会議の参加者たちは、対人関係や感情処理、状況への柔軟な対応力や課題遂行能力など、さまざまなソーシャル・スキルを動員し意志の伝達を試みる。一般に、大学授業科目として実施する異文化交流では、交流言語のスキルアップに直接かかわる語彙や文法の記憶、認知、補償知識の習得を目

標に掲げる場合が多い。しかし実践的異文化接触型コミュニケーションで求められるのは、むしろ場の常識や信頼の醸成に寄与する言動であり、メタ認知、情意、社会的常識など、いわゆる間接的学習方略が語学スキルと補完的に用いられる[L・オックスフォード 01]。筆者はアジア学生会議録画の定量的分析に基づき、NNS と NS の CFL もしくは JFL の言語使用およびコミュニケーション方略についてその特徴を抽出し報告を続けて来た[砂岡和子他 09a][砂岡和子他 09b][砂岡和子他 09c]。本文は、これまでの分析を踏まえ、異文化遠隔対面接触場面の「場の常識」や、信頼醸成過程に焦点を当て、会議後回収した討論参加者へのアンケート結果を引用しつつ、これらが顕在する場の特定とその可視化の方法について考察する。

#### 4. 日中異文化交流の動的可視化プログラム

アジア学生会議は毎回録画に記録し、それを教学用 LMS (Learning Management System) の CourseN@vi にオンデマンド映像として配置し、学生に閲覧を奨励している。しかし動画ビデオから交流障害要因を読み取るのは難しく、長時間に渉る過去の記録を振り返る時間は少ない。そこで我々は、コミュニケーションの障害要因を可視化し、相互にコメントの書き込み・閲覧が可能な Web Video Corpus Learning Platform (WVPC) を構築した[図 1]。



[図 1]

WVPC はアジア学生会議が過去蓄積してきた会議録画 80 本(計約 150 時間)を Corpus 資源とし、うち 24 本について Multi Annotation Program ELAN をカスタマイズして、発話の書き起こしや時間情報、ポーズ、Filler など副言語的情報のラベリング作業を施した。うち 6 本は専門家による談話分析を行い、公開に備え録画の著作権処理を済ませてある<sup>1</sup>。

WVPC は、会議開催日時、使用言語、テーマ、組織名、参加人数、司会校名のほか、個人の国籍、母語、第二言語履修年

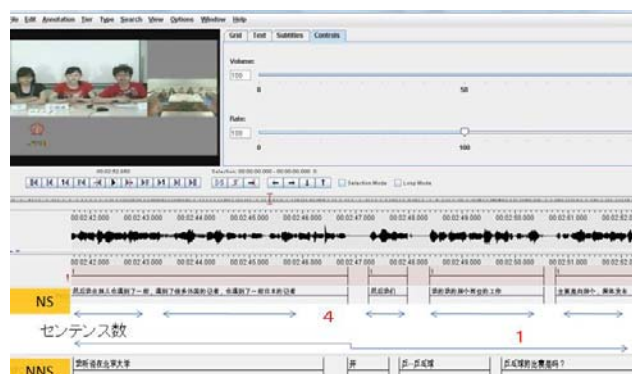
<sup>1</sup> <http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/enkaku/index.html>

数、専門、学年、会議時間など、複数の検索項目から録画コーパスデータを閲覧でき、討論参加者、教師、管理者がそれぞれ会議の交流障害箇所相互にコメントを付与する機能も備える。異文化遠隔交流を動的に可視化するプログラムにより、多元的視点でコミュニケーション障害の要因を共有でき、協調的な交流支援の情報源として利用できる。

### 5. 場の常識と信頼の醸成過程

#### 5.1 NS と NNS の言語力格差

アジア学生会議に参加する NNS の外国語力は、元来 NS とのコミュニケーションレベルに達しない学生が大半を占める。語学力の差は、使用語彙数、語彙難度、センテンスの種類、発音、韻律、イントネーション、発話ターンの頻度、など様々なハンディとして現れる[砂岡和子他 09b]。[図 2]は 2008 年 6 月 26 日、「北京オリンピック」をテーマに中国語で行った討論の一シーンで、NS と NNS の前後する発話を同一時間軸上に並べた図である。NS が 4 文発話した同時間内に、NNS は 4Chank<sup>2</sup>に分け 1 文しか発していない。言語力の顕著な優劣は NS(今回は北京大学 3 名)と NNS(慶応大学生 5 名[全員、中国語は非専攻で初中級レベル])に共通する言葉の壁である。



[図 2]

#### 5.2 身体的言語接触体験の満足度

では、これほど言語力に差がある NNS と NS のコミュニケーションが、なぜ成立するのであろうか? 会議開催後に回収したアンケートでは、NS の 80%が「発言できて満足」と回答し、NNS に至っては「今までで一番よかった!!少数の方がよいのかい<sup>3</sup>(原文ママ、以後同様)」、「今日の TV 会議は発言する回数が多く楽しかった」と充実感を表明している。中には「もっと事前に用意しておけば良かった。もっと聞き取りやすかった。悔しいです」と

<sup>2</sup>録画データを無音区間分割ツール(認識率 70%-90%)で最小発話単位に分割したもので、雑音や笑い声、フィラーなど非言語的要素を含むが、発話の最少単位とみなすことができる。これに発話書き起こしテキストを貼り付け、コミュニケーションの応答状況を時間軸で観察できる。

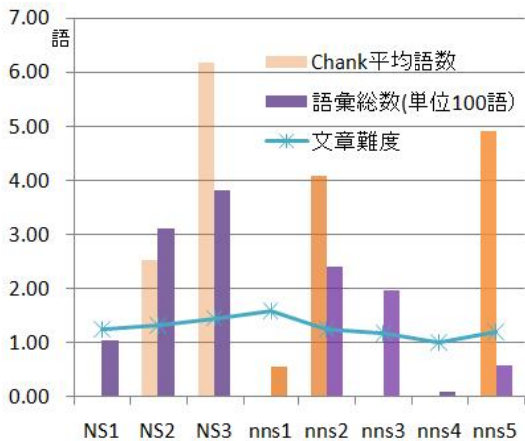
<sup>3</sup> 平常は数校が参加するが、今回は 2 校のみで人数が少なかった。

述べる参加者もいるが、総じて討論者は対面接触体験に喜びを感じ、NNS は言葉の壁をさほど大きな障害と感じていない。毎回録画に同梱して自動回収するアンケートも同様な結果を示し、身体的言語接触で得られるコミュニケーション活動に大きな満足度を感じる事がわかる。反対に不満の理由は「聞き取れない 60%」が「討論の内容が浅い 20%」「接続トラブル 20%」を大きく上回る。実際の遠隔接触場面では、外国語の壁を越える方略には、直接言語型と間接補償ストラテジー発揮型があり、さらに個人対応型と、グループ対処型の2タイプを観察できる。

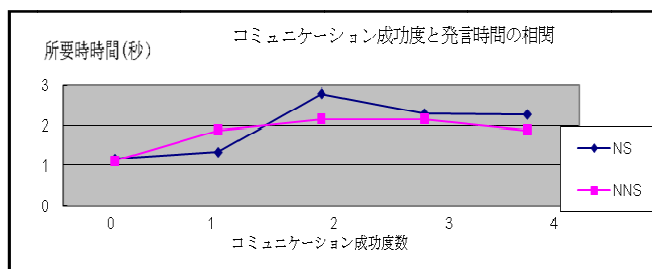
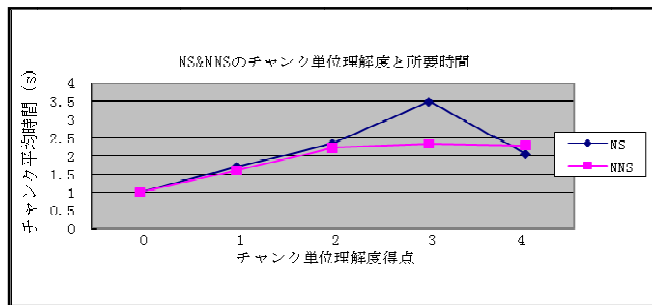
### 5.3 間接的補償ストラテジー

アジア学生遠隔会議では、NNS は NS との言語ギャップを、対人関係や自己の感情処理、状況への柔軟な対応力など、間接的学習方略を發揮して埋めようとする。WVPC Corpus 資源には多数の間接的補償ストラテジーに関するデータが蓄積されている。NNS は NS に比べ、使用語彙総数や Chunk 平均語数が低いにも拘わらず、センテンスの難度は NS とさして変わらない[図 3](前掲 2008 年 6 月 26 日会議)。これは NS が意識的に簡明な言葉を選び、NNS とのコミュニケーション達成度を上げようと、協調的な談話方略を發動した結果と考えられる。つまり NS は発話の理解度を犠牲にしても、NNS とのコミュニケーション達成度を優先することが観察できる[図 4]。

従って NS 相手のコミュニケーションでは、性急に母語話者と同じ語学レベルを目指す必要はない。多くの場合、協調的談話方略により、双方の言語使用レベルが接近する。NNS はむしろ NS に習い、発話中にポーズや笑い声、フィラー、語断片など非言語要素や接続詞および応答詞を導入し、情報を整理して、わかりやすく伝える言語スキルを身に付けることが肝要である[砂岡和子他 09a][砂岡和子他 09b]。こうした協調的談話能力は人対人の対面対話の特徴であり、対話型ロボットの感情表現の付与に加え、今後の実装目標となろう。



[図 3]



[図 4]

### 5.4 信頼の醸成過程

文化摩擦や言語ギャップを超え、NS と NNS が満足度の高い交流が可能な理由のひとつに、コミュニケーションを継続しようとする双方の信頼関係と、相互信頼に基づいた忍耐や寛容な態度を挙げることができる。NS は語学力面で常に劣勢な立場にある NNS に対し、最大の忍耐力を發揮し、NNS の様々な言い誤りやポライトネスの誤用にも極めて寛容である。対して NNS は「予想以上にハイレベルの会議に正直戸惑い」「思うように表現できない自分が口惜しい」気持ちになりながらも、「(他のクラスメイトの)足手まといになってしまうことが多く、毎回申し訳ない気持ちでいっぱい」「言葉ができる人に通訳して欲しいとなかなか言い出せなかった」とともに前述の会議アンケートによる)など、自己責任型、完璧型外国語の呪縛から抜けられない学生も少なくない。参加者個人のこのようなコンプレックスは、異文化接触交流場面で直接、表出されることは少なく、討論終了以後の雑談やアンケートに吐露されることが多い。対して集団としての相互信頼の醸成過程は、発言討論中の感謝の言葉や、態度、身振りの端々に見て取ることができる。ただし具体的表出の方法は、それぞれが所属する文化的・社会的な影響を受け、うなずきの回数、目視の強弱、ポライトネスの表現方法などが異なり興味深い。WVPC 動画資源は、映像画面でこうした表象的内容を視覚化しながら分析するのに適している。

### 5.5 個人と集団の再認識

会議終了後、自身や集団での討論内容について内省を行う学生が多い。「個人的意見が全体の意見を代表しているとは限らず、実際はより多様であることをわかってほしい」「会議ではみ

んなの意見に同調したが、よく考えてみると討論課題の定義が曖昧だった」など、議論をより客観的に見つめ直すのは、本会議が異文化接触型であるためと思われる。「集団の結論に対し、誰かが勇気を持って異見を唱えて欲しかった」など、個人や小集団が、国家やより大規模な集団の価値観を代表することを危惧する声もある。いずれも本会議が、個と集団の関係について再認識する機会となっていることがうかがえる。こうした個人の内省は、異文化接触交流場面で直接、表明されることは少なく、討論を終えた後に会議を振り返って意識されるものであろう。WVPC のコメント書き込み量が増えてゆけば、まとまったデータを分析して興味ある分析結果が期待できよう。

## 謝辞

本研究は平成 19-21 年度文部科学省科学研究費補助金〔基盤(B)課題番号:19320087 研究代表者砂岡和子〕の助成で進行中の成果の一部である。一部データ分析は(株)アイアール・アルトに委託した。

## 参考文献

[L・オックスフォード 01]L・オックスフォード: 宍戸通庸, 供紀子訳: 言語学習ストラテジー-外国語教師が知っておかなければならないこと, 凡人社, 2001

[大塚裕子 09] 大塚裕子, 森本郁代, 水上悦雄, 富田英司, 山内保典, 柏岡秀紀: 科学技術コミュニケーションにおける対話のデザイン, 人工知能学会 Vol.24, 2009, CDROM

[砂岡和子他 09a] 砂岡和子, 俞敬松, 高媛媛: 異言語ビデオ会議における NS と NNS の協調学習の数量的表示と判定基準, 言語処理学会第 15 回年次大会, 言語処理学会第 15 回年次大会論文集 CDROM, 2009 年 3 月

[砂岡和子他 09b] 砂岡和子, 俞敬松, 高媛媛: ビデオ会議での NS と NNS の協調的コミュニケーション方略, SIGNAL 情処研報 Vol.2009, No.2, pp.127-132, 2009 年 1 月

[砂岡和子他 09c] 砂岡和子, 俞敬松, 高媛媛: 多人数インタラクションにおける母語話者の非協調的コミュニケーション特色, 人工知能学会第 23 回全国大会論文集 CDROM412, 2009